



子どもの本から

# しまのずれたとら

大沢 啓子

「お医者さんごっこ」は子どもたちの大好きな遊びである。決して変な意味にとらないでほしい。健全なごっこ遊びの話だ。昔も今も子どもたちは遊びの中で演じる。お医者さんになった子は聴診器を胸にあて、ときには頭や足の音まできいたり、注射をしたり、病人になった子は痛そうに足をひきずったり、この時とばかりにくったりとして甘えて役にな

りきる。看護婦さんはやさしくて、熱を計ったり、包帯をまいてくれたり、薬を飲ませてくれる。どの役もおもしろいので役割を交代して、また遊びがつづいていく。

『ぼくがげんきにしてあげる』は小さなとらと小さなまのそんなごっこ遊びのようなお話だ。

主人公の小さなとらと小さなまは、ドイツでは

シリーズで出版されていて、とても人気のキャラクターのようだ。小さなとらはさみしがりやで甘えん坊、小さなくまはやさしくて頼りになる存在だ。前作の『とらくんへのてがみ』（文化出版局）では、こぐまの手紙を待ちこがれ、それが手元に届くまで元気でないちびとらだったが、この本ではとうとう病気になってしまった。

いったいなんの病気なのだろう。原因不明のぐにやぐにや病か。甘ったれのとらは、本の一頁めからもうたおれてしまつて登場する。そういうばこの本では、とらがまともに自分で立っている場面は見あたらない。いつものびているか、だっこされているか、ごろごろねそべっている。どうしてこんなにデレデレとのびているのだろうか、まるで赤ちゃんのように誰かの支えがないといられない。でもこの絵本をみている読者は、このデレデレを許してあげる気持ちになつている。むしろこのとらを、かわ

い」と思っているにちがいない。他の登場人物たちもだれもとらを赤ちゃん扱いしたり、叱咤激励したりなどしない。とらの気持ちに添ってあげ、何とかしてあげようと一緒になつて困つているようにみ

◀ 『ぼくがげんきにしてあげる』

ヤーノシユ作 石川素子訳

徳間書店 一九九六年



える。

たおれた病人には、いろいろな手当ての方法がある。まず、痛いところに包帯。それから温かくておいしい食べ物。ベッドに寝かせて、そばについてあげることでも不安をとり除く上では大切だ。小さなくまの看護のおかげで小さなとらはすこしずつ回復する。が、完全には治らない。どうやら本当の病気がらしい。

そして、何やらあやしげな、でも小さな仲間たちにとつてはとても信頼できるお医者さん、あわがえる先生にみてもらうことになる。あわがえる先生の正しい診断（？）とおまじないのような治療や、やさしい看護婦かものルーチーさんやがちょうやうさぎなどお見舞いに来た仲間たちの心づかいなど、たくさんの方の暖かさに包まれ、のんびりとゆかいな話の展開で小さなとらは元気になっていく。

とらの病気は、レントゲンの結果「しみが一本ず

れている」ということだった。それは簡単な手術で治るといふ。気持ちのいい注射をするとねむってしまいうすきな青い夢をみる。その間に手術をするというのだ。とらのしまつて本当にずれるのだろうか？ しかも外からみてもわからなかったのにレントゲンでそれがみつきり、手術でもとに戻すとは、一体どうやるのだろうか。読者の不思議はふくらんでいく。——何と楽しいお医者さんだろう。子どもが、お医者さんにつれて行かれていやだったり不安に思うことが、お医者さんごつこの中ではどれも、こわそうでこわくない、痛そうで痛くない、楽しい世界になってしまう。

一方、画面の片すみには一頁めから終わりまで小さな小さなカエルとおもちゃのトラのトラガモが描かれている。カエルとトラガモはとらとくまの一部始終を見ながら、全くのマネっこで演じつづけている。おもちゃのトラガモをとらにみたくて、小さなカ

エルがひとりくまになりきり、トラガモのお世話を  
かいがいしく演じている。ここにもごっこ遊びの世  
界が展開している。

元気になったとらは、また、くまをはじめ仲良し  
の友だちにつれられて、鳴り物入りの行列で病院か  
ら無事、家に帰ってきた。このごっこ遊びもそろそ  
ろ終わりになってきたところで、くまが、遊びの役  
割交代を提案する。

くま「来年は、ぼくが病気になるから、きみがぼ  
くを元気にしてくれるよね」——とら「もちろ  
ん！」

仲良しの二人は、これからもこうして支え合っ  
ていい関係を作っていくのだろう。ところで、この二  
人のごっこ遊びは果して役割交代ができるのだろう  
か。それはちよつとあやしいが、甘ったれでデレデ  
レのとらちゃんだつてくまにとってはきつと、大き  
な大きな心の支えになっているにちがいない。

ヤーノシユの作品はどれも、子どもたちのささや  
かで素朴な願いをユーモラスに描きかなえてしてく  
れている。もう一度、表紙を見てみると、くまがとら  
をだき抱えて運ぶ方向に「パナマ」という立札が小さ  
く描かれている。ここでは唐突な立札だが、この二  
人にとってパナマは、かつて捜し求めたッパナナ  
かおりあふれるあこがれの国<sup>①</sup>なのだ（前々作『パ  
ナマつてすてきだな』あかね書房）。くまが、ぐつ  
たりなつてしまったとらを優しく抱いて我が家へ運  
ぶところなのだが、そこは、二人のあこがれの地、  
パナマでもあったのだ。

（舞々同人）

☆ 二月号五十二頁上段一行目の『ドイツ おもちゃの王国』  
は、『ドイツ おもちゃの国の物語』の誤りでした。お詫  
びして訂正いたします。